

プログラム

モーツァルト

4手のためのソナタ B-dur K.358

1. Allegro 2. Adagio 3. Molt presto

シューマン

東洋の絵 op.66 ~ 6つの即興曲

1. いきいきと 2. 急がずに 心から歌って  
3. 民謡風に 4. 急がずに 5. いきいきと  
6. 静かに 祈るように

シューマン=リスト

献呈 (独奏: 米川雅子)

-----休憩-----

ブラームス

ワルツ op.39-1.4.15

ブラームス

ハンガリー舞曲 1番・5番

ショパン

小犬のワルツ

ノクターン (独奏: 富田理子)

ドヴォルザーク

スラブ舞曲 op.46-8 op.72-2 op.46-1

モーツァルト：4手のためのソナタK.358

今日ではプロの演奏家同志の連弾のコンサートはなかなか開かれなくなってしまいましたが、古典派の時代ではとても重要な位置にあって大作曲家が競って曲を作りました。モーツァルトも例外ではなく生涯に6曲の連弾のピアノソナタを作りました。この変ロ長調のK.358のソナタは、18歳のモーツァルトが5歳年上の姉のナンネルと一緒に弾くことを目的に書かれました。曲は3楽章からできていますが、どの楽章もモーツァルトらしさに溢れていて姉と弟が澁刺と得意気に弾く姿が見えてくるようです。

シューマン：東洋の絵 作品66

この作品は6つの即興曲から出来ています。絵というものはなくアラビアの詩人ハリリが書いたマカーメンという散文詩、それを当時リュッケルトがドイツ語に翻訳したものをシューマンが読んで感動して曲にしたということです。曲はアラビア風かというとは必ずしもそうとは言えませんが、ソーセージのソースにカレー粉を入れてベルリンの名物ができ上がったように、所々に東方風のスパイスが散りばめられています。それより何よりロマン派の最高傑作のひとつとも言われているこの曲、ある時はさまようように、またある時はひそひそ話すように、またある時は決然と前進して行くような変化に富んでいる曲集です。モーツァルトがお姉さんと弾くことを考えて作曲したように、シューマンは愛妻のクララと弾くために作曲しました。(もっとも彼のピアノ独奏曲を含めて全てはクララを念頭に置いているのですが...) 彼女のお父さんの大反対にあって一時は法廷で争ったこともありました。

シューマン=リスト：献呈

もともとはシューマンが作った独唱曲です。まさにクララと願いが叶って結婚できた年に作曲されました。ここでは歌詞はありませんが元の歌詞はリュッケルトによるもので、「君は僕の魂 僕の心、僕の喜び ああ僕の苦しみ…」というような情熱に溢れたものです。リストによるピアノ独奏版ではそれに夢の要素が加わりました。そして原曲にもあるのですが、最後にシューベルトの「アヴェマリア」が引用されて祈るように曲を閉じます。

ブラームス：ワルツ・ハンガリー舞曲より

ブラームスも連弾曲の多い作曲家です。ワルツは16曲あり、有名なハンガリー舞曲もオーケストラ曲が有名ですが、連弾版の方が最初で21曲もあります。他にも「愛の歌」なんていう曲集もあります。ブラームスの先生はシューマンだったことをみなさんはご存知ですか？ブラームスは20歳の時自分の作曲を見てもらうためにデュッセルドルフに住んでいたシューマンを訪ねました。シューマンは当時のドイツで最も有名な作曲家で奥さんは最も有名なピアニストです。「何か弾いてみなさい」緊張の中で弾き始めるとすぐにシューマンは演奏を止めました。いいと思ったのでしょうか「ちょっと」と呼んで出てきたのがクララでした。シューマン43歳、クララ34歳の時です。ブラームスは髭を生やした太った人というイメージをお持ちの方が多いでしょう。それは晩年の姿で20歳のブラームスは大変な美少年でした。一度その青い目で見つめられると女性はみなドキドキだったそうです。シューマン先生に認められた。その喜びを故郷のハンブルグに持ち帰ったのも束の間、1年後に来た知らせは大変ショックなものでした。「作曲家シューマンがライン川に飛びこんで自殺を図った。」彼は取るものも取りあえずデュッセルドルフのシューマン宅に向かいます。